

松本清張全集 9

松本清張全集

9

松本清張全集 9

黒の様式

定価 1400円

1971年12月20日第1刷 1978年4月15日第5刷

著 者

© 松本清張

発行者

樫原雅春

発行所

株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03-265・1211

印刷所

凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

黒の様式

3

解説 丸谷才一

502

装帧 伊藤 憲治

黒の様式

歯止め	5
犯罪広告	53
微笑の儀式	103
二つの声	166
弱気の虫	275
内海の輪	368
死んだ馬	465

齒 止 め

1

能樂堂は八分の入りであった。

津留江利子の坐っている位置は脇正面のうしろ寄り、ちやうど二ノ松に並行するあたりだった。それで、彼女の視角からいって正面席の観客の顔は斜め向きに自然と眼にはいつていた。

江利子は、先ほど、その正面観覧席の中央あたりに旗島はたじま信雄の顔があるのに気づいてから落ちつかなくなっていた。以来、なるべく客席のほうは見ないようにした。舞台では今日彼女が目当てで来ている人間国宝の老能樂師の「班女」が進行していた。この一番を観たら、次の休憩で旗島には知られないように出て行くつもりだった。あと二番残っているが、家のことが気にかかるより、旗島に見つけられるのがいやだった。

旗島は前から顔の幅の広い男だったが、今はすっかり肥えて、その顔が余計にふくらんでいた。髪も前のほうはうす

くなってほとんど禿はげている。いつぞやテレビで見たときの顔よりもまだ老おけていた。両脇に外人夫婦をおいて、しきりと首を左右に回しては能のことを説明していた。五十歳ちやうどのはずだった。死んだ姉の年齢をおぼえているから間違いはなかつた。

江利子が旗島を見つけたのはこの「班女」がはじまってすぐで、その前は姿が無かつた。だから旗島は、この一番のはじまる前に外人を案内して来たらしかった。

江利子は、ちらちらと眼の端にはいつてくる正面のその席が窮屈きうくつになった。正面席と脇正面とは斜めに對むかひ合っているような位置なので、もし旗島が外人への説明をやめて、ちやうどでもこちらを眺めたら、やはり同じ視角に彼女が映るはずだった。江利子は、顔を舞台に据えたままにしたが、首の根が凝こってきた。

舞台は後半の旋律的な動きに変わり、観客の眼も一斉にそれに釘くわづけされていた。

『月重山に隠れぬれば扇あふを挙げてこれを喻たとえ』

と地があつてシテが、
『花琴はなご上に散りぬれば』

という。地が、

『雪を聚あめて春を惜しむ』

とつづけられ、またシテとなるというように、謡も変化がある。

見ないようにはしていても、旗島の遠い顔がぼやけた視

野のなかに動いた。彼は刷りものを見ている外人の婦人の耳もとでしきりとさきやいていた。旗島は一年に一回ぐらゐは外国をまわるので、英、仏、独語がよくできた。

旗島は江利子に気がついていないらしかった。別に旗島に遇つて都合の悪いことはなかった。だが、自殺した姉の夫だと思つと、何となく他人よりも始末が悪かった。しかし、旗島のほうでは江利子を何とも思つてなく、かえつてどこかで偶然に出遇つと懐かしげに寄つてくる。外国に留学したり、教授になつてからも頻繁に海外をまわつてゐる彼は向こう仕込みのフェミニストで、江利子が面映ゆくなるくらい鄭重にしてくれた。いや、それだけではない。やはり義妹という気持をもつていて、懐かしそうに話してゐるのであった。もっとも、姉の素芽子の自殺した過去については、やはり彼もなるべく話題には出さないようにしてゐた。

旗島もその後、妻をもらつて、現在は二十歳になる男の子がいる。去年の秋だったか、銀座で偶然彼に遇つたとき、江利子は無理に誘われてホテルの食堂で昼御飯をご馳走になつたもののだが、そのときの話では、息子はアメリカの大学に留学しているということだった。もう帰国したのだらうか――。

江利子は舞台の感興が引いてきて、舞つてゐる人間国宝の動きも機械的にしか見えなかつた。

姉の素芽子が旗島のところに嫁にいったのは二十歳のとき

きだった。旗島は姉より六つ上であつた。素芽子と江利子とは四つ違つてゐた。

姉と旗島、雄の結婚は恋愛ではなく見合いであつた。雄の父に当たる人が当時朝鮮総督府の何かの局長で、その人の知人の世話で姉の縁談は始まつた。信雄は実の子ではなく、甥であつた。叔父の家に子供が無かつたため、十一のときに養子にもらわれて行つたのである。当時養父は内務省の役人であつた。それが出世をして、姉の縁談があつたときは朝鮮総督府の局長になり、京城に単身赴任してゐた。

旗島の養父になつた実造は出世コースの人で、総督府もほんの腰かけ程度のものでつたらしい。八年か九年ぐらい京城にいて、その後内務省の局長になつたところをみれば、はじめから本省勤務になることがわかつてゐて、妻と子を東京に残してゐたのだろう。

江利子は、その旗島の養父を結婚式のときに初めて見た。そのころは多分四十五、六ぐらいだったのではあるまいか。十六歳の少女の眼から見るとずいぶん老人に見えたが、今だと、それは夫の良夫より一つか二つぐらい下であるから、それほど老けてはいなかつたのだ。

旗島実造の妻は織江といつてゐた。江利子は、姉が興入れる前、自宅に來た織江を二度ばかり見た。背の高い人で、上品な、色白の中年婦人だった。旗島を十一のときから子供にしているの、実の子と同じ気持だといつてゐた。

素芽子との縁談が決まったときは、

（これで信雄にもいい嫁が来て、わたくしも旗島の先祖に申訳が立ちますし、ほんとに安心でございます。ありがとうございます）

と、涙を流して織江が母に礼を述べていたのを江利子はおぼえている。

（こちらこそ、ありがとう存じました。信雄さんは秀才ですから、素芽子が信雄さんについてゆけるかどうか、それが心配です）

母はいっていた。

（秀才といっても、信雄は努力型でございますから、それほどではございません。これまでは、わたくしがあれを力づけて参りましたが、これからは素芽子さんに代わっていただけますので、わたくしも、ほっといたします。あの子は意志が弱うございますから、はたで誰かが支えてやりませんと……）

江利子は、間もなく姉の姑になるひとの言葉を今でもおぼえている。

『今さら世をも人をも怨むまじ　ただ思われぬ身のほどを
思いつづけて独り居の　班女が闌々淋しき　絵に描ける
……』

と、中の舞になつて、舞台では班女がますますリズムカ
ルに動いている。八十歳近い能楽師とは思えぬくらいの身

のこなしに色気が出ていて、その扇の先から笛、鼓の音が
発生しているようである。

観客は陶醉していた。江利子もしばらく見とれていたが、
眼の端にまた旗島の顔がはいってきた。外人に説明するた
め、彼の顔だけが動いているので、どうしても邪魔になっ
てくる。

そうした旗島の落ちつかない癖も、二十三年前の彼にそ
のままであった。工学博士、T大の工学部教授として西洋
建築史を講じている五十歳の彼に、江利子は痩せていた当
時の思い出が戻ってくる。

（お義兄さまって、少し、ひょうきんな方じゃないの？）
江利子は姉の家に行つて、そつと訊いたことがあった。

あれは姉がお嫁にいったあくる年の春だったから、彼女の
十七歳のときであった。姉の素芽子はその年の秋のおわり
に自殺している。

（どうして？）

姉は、まだ新妻らしい初々しい眼で訊き返した。あのこ
ろの瞳は愉しそつだったし、嫁入り前よりは少し肥つてい
たくらいで、頬も赤かった。

江利子は、旗島が何となくそわそわしていて落ちつか
ないので、ひょうきんな人ではないかという言葉を使つたけ
れど、実は、軽薄ではないかと言いたかったのだ。

姉は利口なひとで、江利子のその気持をすぐに察して、
（そうね、眼がきよろきよろしてるわね）

といった。

それは適切な表現で、信雄は絶えず眼を動かして、話をしているも、長くこっちを見つめていることはなかった。じっと坐っていることも少なく、何かすぐに起つてゆきそうな様子であった。気が短いのか、そうでなければ、軽い性格のように江利子には映った。彼には、たしかに気の軽いところはあった。

(でも、ご勉強はよくなさるのでしょうか?)

少し、言いすぎたような気がしたので、江利子がそう訊き直すと、

(そりゃ、とても。江利ちゃんなんか真似できないわよ。六時に学校から帰ると、夜中の三時まで書齋にはいつたりなんだから)

と、姉は生き生きとした眼で答えた。

(毎晩、そうなの?)

(そう)

(それまで、お姉さまも、ずっと起きてらっしゃるの?)

(そりゃね)

姉は火鉢の灰を掻きながら眼を落として言った。

そのころ、助手だった信雄は恩師から属目されて激しい勉強の最中であった。江利子は、同じころに結婚した近所の若夫婦が毎日のようにいっしょに歩いているのを見ていたので、学者の家庭には嫁ぎたくないと思った。また、姉のように頭のよくないことも自覚していた。

信雄は小さいときから秀才であった。彼は小学校も中学校も首席で通した。中学校も高等学校もいちばんの有名校だった。ただ、高等学校時代、受験の前年に成績が落ちて十五、六番目ぐらいであった。養母の織江の話だと、T大に入学出来るかどうか危ぶまれたそうだが、それはかなりな成績ではいっている。

大学では再びその秀才を発揮して、工学部の彼のクラスではいつも首席か二、三番ぐらいであった。卒業は二番だったという。

それから学校に残り、助手になった三年目に素芽子と結婚した。その頃はまだ養父が朝鮮の役人をしていたが、彼女が自殺する三カ月ぐらい前に内務省に移って東京に帰った。その養父も官僚中の秀才で、将来の大成を期待されていたが、二年ぐらいして死んだ。信雄が頭がよかったのもこの叔父の血を継いでいると、織江はよく言っていた。

信雄は、素芽子が自殺した翌年、ドイツに留学した。それは前からの予定だったかもしれないが、ひとつは妻の自殺という彼の傷心を癒してやろうという教授の計らいだったかもしれない。もちろん、姉の死によって江利子と信雄の縁は切れたから、そのあとは、ずっと後年になって信雄の口から直接聞いたり、人づてに耳にはいったりしたことである。

舞台が終わって、拍手が湧いた。

客席から起つ人が多く、あたりがざわめいた。江利子は腰を浮かして正面席を見ると、旗島も外人夫婦も揃って立ち上がっていた。

江利子は、困ったなと思った。旗島もこれで帰るらしい。いま、こつちが動いたら、彼にみられるおそれがあるし、出口はせまいのでいっしょになる危険があった。今まで彼に見つからなかったのが幸いで、また、そこに腰を下ろして、顔を斜めにし、彼らの様子をうかがっていた。

旗島は赤毛の女を前にし、うしろにその夫の背の高い外人を従えて、出口にゆっくり歩いていった。前後に、やはり廊下に出て行く人があった。

江利子は、旗島が見えなくなつて腰をあげた。ここでぐずぐずしていると、次の番組がはじまりそうだし、家のことも気にかかった。

せまい通路から扉を出ると、すぐ横の廊下に旗島が立っていたのには江利子も、ぎよつとなつた。旗島は前からこつちを見ていたらしく、あたかも彼女を待っていたような様子だった。外人夫婦も彼の横にならんでいた。

どぎまぎして、こつちから挨拶するまでもなく、旗島のほうが笑つて、

「やあ」

と声をかけてきた。

「まあ」

仕方がないから、おどろいて見せると、

「江利子さん、来てたんだね」

と、眼鏡の奥から親しそうに眼を細めた。

「ええ。お義兄さまも？」

旗島さんとは、江利子はどうしても言えなかった。姉の生きているときから、そして、後年、ときたま彼に会うときも、そうとしか呼べなかった。あとの奥さんをもらつて二十年余も経っているのに、まだ前のかたちが残っていた。姉が彼の妻だったのは僅か二年たらずの間だったのに。

しかし、旗島は彼女にそう呼んでもらうのがうれしいらしく、偶然に遇ったとき、自分に伴れがあると、これ、妹です、と平気でいった。江利子は相手が変な顔をしているようで、これが愉快でなかった。だが、そんな呼び方をする自分にも半分の落度はあった。

いまも、旗島は横の外人夫婦に、妹です、と江利子を紹介した。先方は何も知らないから、赤毛の夫人はすぐに手をさしのべてきた。その夫も挨拶した。アメリカの建築学者ということだった。妹だ、と先方に紹介しておいて、あとで旗島はその関係を訊かれたら、どんなふうの説明するつもりだろう。前の女房の妹と平気というかもしれない。いや、相手が外国人だからどっちでもいいが、旗島は居合わせる日本人にも、同じことをいうので、江利子はあとで憂鬱になったものだった。

旗島は饒舌で、そのアメリカ夫婦と五分間ばかり英語でしゃべっている間も、江利子を横にひきとめていた。

「君があ席に来ていたのは、知っていたんだ」

と、米人夫婦を先に帰してから、旗島は江利子にいった。

「そう。ご存じでしたの？」

それはそうであろう。こつちが出て行くのを彼は廊下で、待ち伏せしていたんだから、と江利子はうなずき、あんなに首を左右に振って両脇の夫婦に説明していたのに、ちゃんと見ていたのだと思つた。

「で、どう、元氣？」

彼はおだやかな微笑で訊いた。も早、押しも押されぬ一流学者としての貫禄が身につつき、また、その自負が態度のなかににじみ出ていた。

「すっかり、江利さんも落ちついた奥さんになってしまつたね」

旗島は、まじまじと江利子を見た。

「もう、おばあさんになつてしまいましたわ」

「そんなことはない、きれいだよ」

アメリカ人と話したすぐあとのせい、彼は両手の先を少しひろげた。しかし、大体が表現過剰な男だった。

「よかつたら、そのへんでコーヒーでもものまない？」

彼は誘つた。この能楽会館の隅にもお茶をのむところはあるが、せまいし、気分のいい場所とはいえなかった。彼は外に連れ出したがつていたが、江利子は家に早く帰りたいからといって断つた。ずっと前に、旗島にレストランで食事をご馳走になったことがあるが、彼から外国流のサ

ービスをしてもらつて、まわりに気恥ずかしい思いをしたことがある。

「そう。そりゃ、残念だな」

旗島も、しつこくは言わなかったが、もう一度、江利子の顔を見つめるようにして、

「姉さんが生きていたら、いまの君の顔と同じになつてたろうな」

と、言つた。

旗島は、彼女に遇うたびに姉に似ているといつては懐かしそうな眼をむけた。これに江利子はいつも反発を感じる。姉を自殺に追いやつた彼なのに、平氣でそんなことを口にする神経が理解できない。普通だと、彼がそれを避けるのが自然だと思ふのだった。

2

江利子が家に帰つたのは四時ごろだった。

すぐに息子の恭太の部屋をのぞいた。奥の四畳半で、入口はドアになっている。外から小さな南京錠がかかつていた。

江利子は、予想していたものの、がっかりして茶の間に坐つた。すぐに着替える氣もなかった。

恭太の部屋は初め襖だったが、落ちついて勉強ができないという理由で改造し、ドアにしたものだ。恭太は十七歳で、高校二年生だった。大学の受験準備をしている。しか

し、恭太が入口をドアに直させ、だれもそこに入れないわけを江利子はあとになって発見した。

恭太の留守に、鍵のかかってなかったその部屋に二、三度はいってのことだった。部屋はいつも乱雑を極めていた。敷き放しの蒲団は、二つに折っただけだ。ひろげると、脱ぎ捨てた寝巻がぐしゃぐしゃになって間に突っこんであつた。それに異様な臭気がかもつていた。それはある特殊な臭気だった。その寝巻を洗濯するとき痕跡があつた。

江利子は蒼くなつた。近ごろ、息子がパンツだけは自分で洗いはじめた理由もわかつた。蒲団のカバーにも同じ臭いが残つていた。

畳の上は足の踏入れ場もなかつた。本、紙が散乱し、ラジオは鳴りっぱなしであつた。ポータブルはどうに壊れ、ジャズや歌謡曲のレコードも何枚か割れていた。壁には、週刊誌の口絵を切り取った女優やヌードの写真が、アメリカ兵の個室みたいに所嫌わず貼つてある。勉強の割当時間表は一応かけてあるが、そんなものに用のないことはひと目でわかつた。机の下には、バチンコ屋から取つてきたらしい煙草の空函があり、紅茶の蓋に吸殻が灰まみれで散つていた。

江利子は初めてそれを見たときは、帰ってきた恭太を叱つた。しかし、寝巻の濁つた斑点にはふれることはできなかった。学校の成績は中以下だし、そんなことでは大学受験は覚束ない、と言つた。

(大丈夫だよ。おれに任せてくれよ)

恭太は母親にせせら笑つた。声変わりした、やくぎのような口調だった。真面目な話は少しもしない。テレビの低俗な番組を見ては大口を開いて笑う。

江利子は怖ろしくなつて、勤めから帰つた夫の良夫に告げた。夫も顔をしかめた。

(わたしではもう手におえないから、あなたから言つて下さい)

と頼んだ。しばらくすると、恭太の部屋から、良夫の怒声と、物を抛るような物音とが聞こえた。江利子は慄えた。そこから戻ってきた夫は、昂奮を抑えるような顔つきで坐り、煙草ばかりつづけて吹かした。

(困つたやつだ)

夫は、いま恭太の部屋から週刊誌を全部引つ張り出して庭に抛り出した、と言つた。壁の絵や写真も剣ぎ取れと命じた、と言つた。

(わたしにはとても想像がつきませんわ)

と、江利子は涙を泛べたものである。

(おれにも多少の覚えがないでもない。しかし、いまは俗悪な週刊誌がいっぱい出ているからな。困つたものだ)

江利子は、おれにも覚えがあると夫の洩らした言葉に、思わず眼を向けた。夫はちよつと眼を逸らしたが、すぐに分別臭い顔に戻つて、顎の下に指を当てた。彼女は、夫まで息子の同類にみえた。そのとき恭太が家を震わすような

ドアの音を立てて出て行った。

——そういうことが何度かあった。江利子は子供に絶望感をもってきた。

夫は、心配することはない、あの年ごろにはみんなそうした変化がある、それは子供が大人になろうとする変わり目の生理的なものだと言った。それが反抗となって現れたり、抑鬱症^{うつしやう}となって現れたりするともいった。

（あなたは始終外に出てらっしゃるから、子供のことは気になさらないのね）

江利子は夫に腹を立てて言ったことがある。

（それは気にしてるさ。しかし、君が心配するほどのことはないというんだ。ぼくもあの年ごろには覚えがあるからね）

（どういう経験ですの？）

夫は黙っていた。江利子は夫の表情に自分が困り、

（恭太はどうなるかわかりませんわ）

と、話を変えて溜息をついたものだった。

（それが苦労性というんだよ。まあ、赤ん坊のときの麻疹^{はしか}みたいなものだ。まもなくケロリと癒^{なほ}る）

（でも、その麻疹のときに大学試験を受けるんですもの、うまく受かるかどうかわかりませんよ）

（一年ぐらゐの浪人は普通だからな）

（あなたのそういうときにも、あんないやらしい写真を壁にベタベタお貼りになっていらしたの？）

（ぼくのときにはそんな週刊誌はなかった。裸の写真もなかったよ。もっぱら映画女優のプロマイドだったな）

夫は自分の経験というものを告白しなかった。江利子も訊かなかった。訊かなくとも想像ができた。江利子は、恭太のもっと忌まわしい秘密を知っていた。それはたとえ夫でも羞恥^{しやうち}から告げられなかった。その限りでは、恭太は息子ではなく、男であった。夫の前では口に出せなかった。

しかし、夫はそれを察しているようであった。夫は、生理的な変化だといひ、自分にも覚えがあった。どのような経験ですか、ときくと、黙って苦い顔をした。夫にも恭太がどんなことをしているかわかっているのだ。不潔な麻疹であった。

江利子は、婦人雑誌などに載っている、そうした記事に注意して読んだり、家庭医学書を買ってきてのぞいたりした。それは十四、五歳ごろからおぼえるもので、結局は当人の自制によるほかはないという結論であった。江利子には、雑誌にある実例のように、息子にむかってそんなことは論せなかつた。彼女は古い家庭に育った人間だった。

どの本にも、そうした悪癖が頭脳を悪くすると書いてあった。顔色が蒼白くなり、動作が鈍くなり、ぼんやりとなるものだと述べられてあった。だが、恭太は相変わらず血色がよく、行動は粗暴だった。そのへんは江利子も妙に安心したが、頭脳に影響するというのが不安であった。

前から学校の成績のいい子ではなかった。しかし、この状態では大学入試は失敗するにきまっていた。悪くすると、三年は浪人するかも知らなかった。有名大学にはいれと強要しているわけではないが、せめて、普通なみのところにはいってもらいたい。だが、それもできず、二、三年浪人をつづけたら、どんなグレかたをされるかわからなかった。江利子はそれが恐ろしかった。

だれにも相談することができなかった。夫とは、いずれつきつめたことを話し合わなければならないのだが、そうなる前に、恭太の上に、その習癖が自然に通過することを江利子は望んだ。男のだれもがその経験を持っているとしたら、それがはしかだったのであろう。だから息子も心配することはないような気もしないではない。

しかし、今は息子の大事なときだった。大学だけはいってもらいたかった。といって叱つても聞き入れる子ではなかった。ふてぶてしく、せせら笑うし、少し熱心に言うことと反逆してくる。勉強に身を入れるどころか、彼の密室では、ラジオの歌謡曲が鳴り放しだし、きわどい写真や挿絵のついた週刊誌は、参考書の間や、机の下にごろごろしていた。そんなものを見て恭太が何をしているかと思うと、江利子は寒気がした。息子が小遣いをとるのも強奪に近かった。夫は、あれ以来、何回となく恭太の部屋に押し入って、壁の写真を剥ぎ、週刊誌を抛り出したが、効き目はなかった。すぐに同じことになった。

(おれでは、もう手におえなくなったな)

と、夫も半分は諦め顔だった。

(あいつ、力も強くなつたし、簡単にひきずり出すわけにはいかなかった)

五十に三つ足りない夫の良夫は、そういえば手の甲に皺が寄ってきていた。息子は胸幅がひろくなっている。

(昔の芝居でよくするね。勘当というやつ。あの親の氣持がわかってきたよ)

恭太は独り息子だった。まさか家から出すわけにはゆかなかった。

江利子は能楽堂で旗島に遇った日も、恭太のことが気にかかって、まだ引きとめそうな彼をふり切つて戻つたのだが、やはり息子は外に出て行つていた。

近所からお手伝いとして通いで頼んでいるおばさんにきくと、昼飯をたべて、一時ごろにとび出したという。それなら、自分が水道橋に出かけてすぐであつた。いまごろは何をしているかわかつたものではなかった。パチンコ屋に暗くなるまで立っているか、友だちの家でくだらぬ話をし、ゲラゲラと笑い合っているかだろう。江利子の耳には息子の声変わりした厭な笑いが聞こえるようだった。

そういえば恭太の枕元にはチョコレートと空函や銀紙の殻が散っている。机の抽出しにも煙草がある。それがみんなパチンコ屋の景品だった。

金を与えなければいいと思うのだけれど、恭太は手に握

るまで承知しなかった。与えないと、そのへんの戸障子を破れるばかりに揺ぶりをかける。金槌で柱を殴りつける。そんな疵が柱の角や、鴨居や、ドアに残っていた。だんだん凶暴性になってくるようであった。ドアの蝶番も何度かこわれた。恭太の留守に、夫や江利子が彼の部屋にはいれるのはドアがこわれたときであった。

息子の乱暴が手伝いのおばさんに体裁が悪く、つい、江利子は小遣いを与えた。おばさんはやむを得りであったから、近所が怖かった。

あれでは、大学はとてども駄目だ、と夫の良夫も言うようになった。江利子は、両親が無力なら、適当な誰かを呼んで来て、恭太の説得を頼みたくなった。両親には反抗しても、第三者の言うことには従順かもしれないのである。

彼女は、それを一度、夫に相談したことがあった。

（相談って、いい人がいるかい？）

夫はそのとき訊いた。

（そう。あまり気持がすまないけれど、旗島さんはどうかしら？）

（ふうむ）

夫は考えこんだ。

旗島信雄なら、そのような説得役には申し分がなかった。T大の教授である。中学校も、高校も、大学も東京の一流校でずっといい成績で通してきた秀才であった。現在でも有名教授として、よく海外の学会に年に一回は出かける。

新聞、雑誌によく寄稿し、テレビ、ラジオにも出ている。名士であった。両親に反抗する恭太も、彼の言うことを聞くだろう。

（しかし、君の姉さんの前のご亭主だからなあ）

と、夫は気重な顔つきで言った。

（そうなの。わたしも、そう思うわ。だから気乗りはしないのだけど）

江利子は、うっかり旗島の名を口に出したのをすぐ後悔した。だが、背に腹はかえられない気持だった。

（それに、姉さんは死んだのだし、そのあと別な奥さんが来て、二十年以上も経っているのだから。いくら、君が、その間に偶然に旗島さんに遇ったとしてもだよ）

夫は、江利子の姉が自殺したことも、結婚後、間もなく彼女が話して知っていた。

（そうなの。わたしも旗島さんをお願いするのは厭だわ。

やめます）

夫には、そんなことまでは打ち明けてないが、旗島は江利子と路上でばったり遇うと、いつも懐かしそうに話しかけてきた。伴れがあれば、妹だといって誇らしげに彼女を紹介した。前から、話の好きな人で、人なつこいほうだった。外国によく出かけて、向こうの人とも交際がひろくあったせいも、生来、女性には親切なほうだったが、それに磨きがかかってきた。二、三度、江利子は彼の誘いを断わりきれず、ホテルの食堂で食事をいっしょにしたり、街の